障害と自由

－自己・他己双対理論に基づく新たな自由観の構築－

障害児教育専攻

清重　友輝　　指導教官　中塚　善次郎　教授

序章

近代から現代にかけて、実際的な自由論において最大の焦点となってきたのは、個人における「自由の最大限の実現」はどのようにして行われるものか、ということである。一般的な人々を含め、自由に携わる者の多くは、自己の自由をどのように拡大させるかという一点に対してのみ大きな関心を寄せる。だが、そうした態度が自由に関する理解を一面的なものにとどめていることは否めない。我々は、現状の自由に満ちる環境の中で、それに流されるのではなく、その激流に抗う形で、自由の本源的な意義について問い直さなければならない。この際に、重要な役割を果たすのが、「障害者」の存在であると、本論では考えている。

第一章　自由についての概念的考察

第一章の主要な目的は、現代的自由観の本質的特徴を明らかにするとともに、その功罪を問うことにある。

第一節では、自由論を進めるために必要と考えられるいくつかの事項について、若干の予備的考察を行った。本論において考察の対象としているのは、主に現代的観念として想起されるところの自由であるが、その本質的特徴として、束縛の否定あるいは除去に伴う「自己拡大志向性」の解放と定義した。また、そうした自由が有限性を持つこと、一定の制約を受けること、欲求と理性との関わりなどについて考察を行った。

第二節では、自由に関する先行研究について論考を行った。ここで取り上げたのは、Hobbes、Locke、Mill、Fromm、Rousseau の五人であるが、彼らの思想に共通のものとして、国家や社会と対になるところの「個人」を価値の主体として認識していることが見られた。現代的な価値観の基盤は近代以降に形成されたものであり、現代的自由観は彼らが述べる自由観を正しく継承するものと言えるが、その性質は、全てそれが優れて個人的な概念であることに依るとの考察を得た。

第三節では、第一節と第二節の論考を踏まえて、現代的な自由概念について総合的な考察を行った。その結果、自由は各人の主体性や自発性、能動性などの積極的な発揮を促進し、人間の活動一般に活気と活力を与える一方、人間同士の結合を弱体化させ、我々の精神から他者性を喪失させることで社会構造に動揺を与えるとの結論を得た。

第二章　障害と自由との関連性

第二章の主要な目的は、個人的自由が普遍的価値とされる、自由主義的な現代社会の在り方について、障害者存在を基点として問いただしていくことである。

第一節では、障害者と自由との関係性について論考を行った。現代での障害者運動の流れは、障害者の自立（依存の極小化と自己決定権の極大化＝個人的自由の増大）に重きが置かれており、自立した個人の形成が目標とされている。だが、そ

れは他者からの援助を必要とする障害者の本質的特徴からすれば、決して望ましいものではない。自立の確立＝自由の増加は、他者との関係性の弱体化・希薄化と同義であり、それは障害者が何より必要とする他者からの温かな支援を失わせる契機となり得る。障害者の幸福を考えるのであれば、それは容認できないと考える。

第二節では、現状の自由主義社会とその諸問題について論考を行った。現代における自由は、一定の規模にとどまることなく、その影響力と支配力を拡大し続けている。現代社会の基本要素である民主主義にせよ、基本的人権にせよ、それは個人の自由を保障しても、個人の自由を抑制するのに適したものではない。それらが盛んに主張されるほど、逆に他者との緊密な関係性は失われ、社会は一層不安定な状態になると考えられる。

第三節では、我々が今後進むべき方向性について、若干の基礎的論考を行った。その結果、現代では、全てが自己原理（自己存在の尊重と追求に関わる原理）を唯一の基準として図られるが、そうではなく、我々が進むべき道は他者性の回復にこそ求められなければならないとの結論を得た。

第三章　自己・他己双対理論に基づく新たな自由観の構築

第三章での主要な目的は、心理学的・哲学的な見地から自由への論考をさらに深化させ、新たな自由観を構築することである。

第一節では、本章での論考の基礎となる中塚（1994）の提唱する「自己・他己双対理論」と、この理論を支える「人間精神の心理学モデル」に関する解説を行った。

第二節では、理論に基づいて、自由と、自由に関わる諸概念について心理学的な見地から検討を行った。その結果、自由は「自己」の働きを豊かにするが、同時に「他己」を萎縮させる可能性を持つものであり、その結果として、自由が過剰に追求された場合には、人は孤独感と不安感に苛まれ、その解消を図るために積極的な欲望追求が行われるとの考察を得た。また、理性の欠陥や現代的価値観の根本的不備についても、論考を行った。

第三節では、自己・他己双対理論を理論的支柱ととして、新たな自由観の提示を行うことを目的としている。我々人間は本質的に限定的な存在であり、自由になることと自由にならないこととは明確に区別されている。生老病死など、自らの自由にならないものを自由にしようとすることが、不自由の根元であり、そうしたエゴからの脱却が真の自由状態へと結びつく。自己を肯定しようとすればするほど、他者存在は自己を否定しようと迫るのであり、自己への執着心を捨て去ることで、人は真の自己肯定へと接近する。そうした状態こそが、人間における真の自由状態であると考えられる。このような状態が実現されるためには、能力（認知能力や運動能力）の向上はほとんど無意味であり、究極的には、修行による無意識の錬磨が必要になると考える。

終章

自由とは可能性であり、自由の獲得は自己実現の契機を与えられたということでもある。しかし、正しい自己実現が行われるためには、我々には相応の苦難が求められる。ただ安楽な欲求の充足のみを図ることが人生の目的ではない。人間を空しくする堕落の自由を、人間存在にとって正しい自由の使い方ということはできない。人間にとって、与えられた自由をどのように用いるかは、重要な課題である。我々に求められる自由とは、究極的には、欲望に打ち克つ自由であり、真の自由状態へと至る自由でしかないと考える。